

ヤジと演説会の「秩序」

——大杉栄「新秩序の創造」——評論の評論——「を手がかりに——

服 部 宏 昭

一、はじめに——「メディア論」の論者、大杉栄——

多くの評伝^①が伝える大杉栄の生涯は「一等俳優」（久米正雄「一等俳優」『改造』一九三三年一月）と称せられた通り、波瀾に満ちている。しかし、彼を思想家として評価するのは難しいようだ。例えば、谷沢永一は次のような発言をしている。

独創性がないくせに、何か思想的、文学的、いろんなバイタリティと、それから特殊の魅力があって、何があるのかと思って読んでみると何もない。おかしい人物じゃないかという気がします。あんな人物はちょっとほかに類例がないですね。（第四章 大正期の評論」、紅野敏郎「司会」、西垣勤、谷沢永一、助川徳是、高橋春雄『シンポジウム日本文学17 大正文学』一九七六年一〇月、學生社）

「バイタリティ」溢れる活動で「特殊の魅力」を備えた評論を著し

たが、そこに読むべきものが「何もない」。しかし、「独創性」という評価軸によるこの指摘は、直ちに思想家失格には繋がらない。「おかしい人物」、「類例がない」人物といった評価から伺えるように、失格という烙印を押させない何かがあるようなのだ。とするならば、大沢正道の先駆的著書『大杉栄研究』から、身体感覚に注目した梅森直之の論考^②に至る思想を対象とした先行研究は、その何かを探るための議論と言えるかもしれない^③。また、評伝研究や思想研究という場を離れ、大杉研究という全体を見渡せば「大杉栄はメディア論、コミュニケーション論、カルチュラル・スタディーズの対象としても宝の山だ」（浅羽通明「第一章 この人を見よ！——アナーキストの肖像『大杉栄』（日本の名著46）」「アナーキズム」二〇〇四年五月、ちくま新書）といった示唆的な指摘もあり、新たな展開を迎えつつある。

本稿では、この示唆を受けて「メディア論、コミュニケーション論」の論者として、そして、その実践者としての大杉像を立ち上げ

てみたい。⁽⁴⁾ 思想とパフォーマンスな生との連関性をもたらすこの試みは、大杉研究において貴重な視座を用意できると思われるからだ。この考察に相応しい事例として「演説会もらい」という実践がある。⁽⁵⁾ この実践は演壇の弁士をヤジり倒した揚句、演壇を奪取するという演説会ジャックである。が、この実践に対する非難が強かったためか、彼は小論「新秩序の創造——評論の評論——」（『労働運動』一九二〇年六月。以下、本稿では「新秩序の創造」と記す）でヤジの目的を記して、弁明している。それによれば、ヤジは演説という一方通行のメディアを、弁士と聴衆による「対話」へと導く手段とされる。この手段を「メディア論、コミュニケーション論」の問題として把握する場合、まず演説会の空間、それに関わる弁士と聴衆の身体性を明らかにする必要があるだろう。そこで、演説会の空間——大杉の言葉を借りれば演説会の「秩序」——を明らかにした上で、「新秩序の創造」を手がかりにヤジの戦略を明らかにすることを、本稿の目的としたい。⁽⁶⁾ なお、引用に際しルビは必要に留め、通行の漢字、平仮名を用い、仮名遣いは原本通りとした。

二、「秩序」を生む身体——雄弁術を手がかりに——

大杉は「新秩序の創造」で演説会を階級社会と二重写しにして、次のように記している。

音頭取りの音頭につれて踊る社会では、学校でも演説会でもそうだが、講壇や演壇の上の人は、一人でも長い独白を続けて、下の人々に教える。下の人々を導く。しかし人間がだんだん発

意を重んずるようになると、その長い独白がちょいちょい聴衆の質問や反駁にであって中断される。そしてついには、いわゆる講義や演説が壇上の人と壇下の人々との対話になって、一種の討論会が現出する。

演説会は討論会じゃないと言う。またそうなのは会場の秩序が保てないと言う。そして弁士の演説に一言二言の批評を加える僕等を、その演説会の妨害か打ちこわしかに来たものと考え、警察官と主催者と聴衆とが一緒になって騒ぎ出す。馬鹿なことだ。⁽⁷⁾

弁士は弁じることによって、聴衆を「教え」「導く」。一方の聴衆はその話を黙って聴き、ヤジがあれば「騒ぎ出す」（右の引用の場合、大杉（ら）の「演説会もらい」の「悪評」が手伝ったこともある）。ここに両者の〈話す〉——〈聴く〉——という行為に基づく演説会の「秩序」が、現出する。

演説における弁士の目的は「自己の思想を表現し、他に伝達する計りではなく、自己の思想に他をして感動せしめ、自分に同化せしめる」（善利国臣「最も苦心する此の二ヶ条」）「演説に就いて私の最も苦心した点」『雄弁』一九二四年三月）ことであり、大杉はそれを「音頭取りの音頭」と喝破し、聴衆をそれに加担する共犯者として「馬鹿なことだ」と嘆息している。だが、その批判的なまなざしで捕捉できていないであろう領域がある。それが大正期に流通した雄弁術である。雄弁術とは修辞学や音声、ジェスチャー、果ては会場設営まで幅広く演説に関する技法を検討したものであり、「音頭取り」である弁士の身体性を考察する上で貴重な視座を与えてくれ

ると考えられる。そこで、本章では彼が見落としていたであろう雄弁術、特にジェスチャーに絞って、どのように弁士の身体を構築しているのかを考察したい。

先述した通り、大正期を通じて多くの雄弁術に関する書籍、論文が流通し、その中でジェスチャーは検討されてきた。例えば、平岡信敏はジェスチャーを次のように定義付けている。やや長い引用となるが、見ておこう。

態度は、たゞ手や足の動かし方にのみではない。これは聴衆の眼に届く範囲に於て演説者の頭の上から足の爪先までの身体全部に表現される動作である。だから私はジェスチュアは聴衆が演説者の姿を認めた時から見えなくなつたまで、あるといふのであります。即ち入場、講演、退場の態度の全部を私はジェスチュアといふ範囲に入れたのである。故に話す前、話した後に演説者が拙いことをしたら、夫は中味の話を破壊すること甚しいといふことを自覚してゐねばならぬのである。其のために先づ私共はジェスチュアを研究練習するならば先づ第一に、自分の首や胴や手や足が、自分の思ふ通りに使へるかといふことを反省すべきである。これが出来るとなつたら占めた物である、自己の思想の発現と共にそれに伴ふ運動が易々としてジェスチュアといふもので現されてくるそしてそれは如何にも自然で、天真で、無理や嫌気のないものとして認められるのであるが、初心の時は無我夢中で後でもつて臍をかむのである。要するに、雄弁に於けるジェスチュアの価値は、第一聴衆の注意を纏めるために、第二、言語の意味を強めるために、第三、

言語を省略するためにありといふことに帰着するのである。

〔壇上の身振り手振りは此の呼吸〕『雄弁』一九二五年四月

この定義から分かるように、ジェスチャーとは見（魅）せると同時に、見られるという聴衆のまなざしを前提としていることは明らかであろう。だが、それゆえに大きなリスクを負うことになる。ジェスチャーは弁舌による伝達の補助を目的としているが、「話す前、話した後」に演説者が拙いことをしたら、夫は中味の話を破壊する」と述べられているように、伝達効果において両者の立場は逆転してしまう。ジェスチャーの不自然さが、聴衆の注意を弁舌から奪ってしまうからだ。ジェスチャーに「自然」さが求められるのは、そのためである。

加えて、演説会が一過性の場であることが、パフォーマンス的なメディア（＝伝達媒体）における危険性を増大させる。もし、ジェスチャーに支障をきたす、言い換えれば、身体が見（魅）せる機能を失うという事態が生じたならば、聴衆と「同化」することが難しくなるだろう。このようなリスクを回避するために、ジェスチャーが雄弁術において検討され、弁士に利用されたのである。

また、この弁士の身体と関係するのが、演説会場の「光線」である。次の引用は、古市春彦「日本の大都市に於ける演説会場の批判」〔『雄弁』一九二三年三月〕の一節である。

演説の種類、演説者の素質等によつて、光線の分量や発光或は照射の場所にも差異を生ずるのは勿論であるが、極く一般的の私の標準を示すとすれば、私は左の数条を挙げる。（一）会場全体がなるべく明るい方がよい。（二）演説者の顔、身体

表情動作が聴衆からよく判る様に特別の光線が必要である。

(三) 演説者が大抵の場合演説中視点を集注する点がある筈であるが、その近所は特に明るくして、聴衆の表情が充分演説者に看取せらるゝ様でなければならぬ。その位置は、一概には云へないが、プラットフォームから向つて会場の長さの十分の七の所、左右から云へば中央、(四) 会場の隅々、——殊にプラットフォームに対向する二隅、二階があれば階上、階下とも、——は光線が充分でなければならぬ。

ここで述べられている「光線」の役割は、弁士の「顔、身体、表情動作」(「特別の光線が必要である」とさえ述べている)と、聴衆の「表情」を明瞭にさせるというものである。この効果を端的に言えば、前者は弁士のジェスチャーの効果を強め、その意図を明確に印象づけるもの、後者は、会場の聴衆の様子を把握させやすくし、弁舌を助けるものといえよう。いずれも、弁士の身体性、視覚的権力を強めていく役割を担っているといえる。だが、前者に限って言えば、聴衆のまなざし、視覚的権力を先鋭化する役割を、同時に担っているのだ。それゆえ、聴衆と関係を結ぼうとする弁士は、演説会場の設備をも掌中に治める必要があった。次の引用は「地方に於ける臨時、応急的な会場で語」る場合であるが、それをよく表している。

理想としては演説、又は講演を承諾する時に、その条件の一として会場の諸設備を自分の考へる方法に依つてなさしめることが妥当であると思ふ。(四方木麻二「会場選定の諸要件」□自己を知り、聴衆を知り、会場を知れ!」「講演者提要(一)」)

『雄弁研究』一九二四年六月)

弁士が雄弁を振るうことができるのは、その身体が見(魅)せる機能を持ち得た時のみである。言い換えれば、弁士のパフォーマンスな身体を聴衆が認めた結果、であると言える。そして、その身体は、会場の光と結びつき、雄弁な弁士の像として壇上に現れる。演説会の「秩序」が誕生するのは、まさにこの瞬間である。この演説会の「秩序」の誕生において、雄弁術が果たした役割は決して小さいものとは言えないだろう。

大杉が見た演説会の「秩序」の実相とは、以上のようなものだった。彼が対峙したのは、弁士の演説を潤滑に機能させた雄弁術にほかならない。この雄弁術に対して、彼はどのように立ち向かったのだろうか。

三、「秩序」を崩す——ヤジの戦略——

前章では、大杉が敵視した演説会の「秩序」が雄弁術に他ならないことを明らかにした。本章では、この演説会の「秩序」に対して、大杉のヤジがそれをどのように崩し、「対話」へと導こうとしたのか、その戦略を検討する。この問題を考察するために、ヤジの対処法を見ておく必要がある。左の引用は、その点について、安部磯雄が述べたものである。見ておこう。

弥次に対する心得としては、大体に於て私は(一)全然弥次に応酬せざること(二)併し臨機の処置として頓知を以て弥次を撃退すること(三)甚だしく弥次に妨害される虞ありて、一二

の方法を以てして尚収拾すべからずと思考したる場合は、最初から演説に間隙を置かず、最後迄全速力で推進むことの三つが必要であると考へて居るのである。「弥次に対する心得」『雄弁研究』一九二四年五月

基本的には応酬しないことが、ヤジに対処する一番良い方法であることが述べられている。なぜなら、ヤジに応酬すると「弥次の方が愈々附け込んで来て、それが為めに演説会場を混乱状態に陥れることがないとも限ら」ないからである（安部、前掲論文）。聴衆の混乱は、見（魅）せねばならない弁士にとって致命的であり、それを回避するための雄弁術上の方法だった。だが、弁士のヤジに対する態度は、大杉の戦略においては無効化される。次に引用するのは、実際に彼が弁士にヤジを飛ばしたシーンである。

いつかの晩だつてそうだ。最初僕等がヤジりだした時には、聴集のほとんど全部が起ちあがつて、つまみ出せの黙れのと怒鳴り出した。警察官は僕等を取り囲んだ。そして僕等の手足をとって引き出そうとした。が、僕等の方の勢いも相応に強いので、もししいて、そうしようとすれば、かえって会場の秩序を全く打ちこわしてしまふような形勢になった。それに、聴集の中にも、僕等が警察官の暴力を受けそうになると、急にその民衆的本能を出して、僕等をかばいにかかるものが出て来る。敏感な警察官等は、直ぐにそれを察して、やむを得ず手を引きました。

僕等はその勢いに乗じてますますヤジった。弁士の議論のあいまい矛盾を指摘した。その言わんと欲して言い得ざるの点を

補足した。僕等のヤジはたいていその肯綮に当たっていた。聴集は僕等のヤジに拍手しだした。そして自らもまただんだん、弁士の言論に対する質問や反駁のいわゆるヤジを始めた。弁士や主催者や警察官は、にがり切った顔をして、仕方なしに黙認していた。（『新秩序の創造』）

この「いつかの晩」の演説は、一九二〇年四月三日に開催された、文化学会主催による森戸辰男の筆禍事件の批判を旨とする言論圧迫問責演説会であり、ヤジを飛ばされた弁士とは、賀川豊彦と言われる。後に、賀川は、大杉への追悼文「可愛い男大杉栄——悪口云はれても悪い気はしない——」（『改造』一九二三年一月）で、この演説会について回想しているが、右の引用と比べれば様子が異なっている。この記述の違いについて、大沢正道は「弥次って演壇に上ったものと、弥次られて演壇を明け渡したものと相違であろう」と述べている。⁽¹⁰⁾ここでは、大沢の指摘に従って論を進めることにしよう。

先に見たとおり、弁士は演説会の「秩序」を保つためにヤジの無視を決め込むが、一方の聴衆は弁士と異なる行動を起こす。それは、前章の冒頭でも見た聴衆自身によるヤジの排除である。この行動は、演説会の「秩序」への侵犯に対する一種の防衛行動と言つてよい。弁士に見（魅）せられている聴衆にとって、ヤジはノイズでしかなく、ヤジに対して、自然と敵意を抱き、排除の声を挙げる。だが、彼らの防衛行動は、彼らが意図せぬまま、弁士が回避しようとした演説会場の混乱へと誘っていくのである。混乱した会場では、弁士は、その見（魅）せる身体を失い、聴衆から、そして演説会場から

切り離された存在へと変貌していく。これは、明らかに雄弁術の反作用であり、見（魅）せられている聴衆だからこそ、起きる事態と言ってよいだろう。

さて、このように、大杉（ら）のヤジは会場における弁士の孤立化Ⅱ演説会の「秩序」の崩壊を促した。大杉は演説会を「発意と合意とのけいこ」の場と述べたが、会場に巻き起こる聴衆のヤジを「発意」の表れと言ってよければ、彼の目的は達成されたと言えるだろう。が、一方の「合意」はどうだろうか。「合意」とは、彼が導こうとする「対話」によって成立するものだ。ここで、一つの問題が生じる。それは、「対話」に導くために、どのようにヤジの嵐を沈めるかという難問だ。先の引用を見ると、大杉（ら）が警察官に「暴力」を振るわれそうになると、当初、敵意を抱いていた聴衆が、彼らをかばいにかかり、以降、両者が手を携える、といったシーンが描かれている。両者が手握った理由は、そのヤジの内容によるとも言えるが、直接の原因は、明らかに警察官の「暴力」であろう。この「暴力」によって、大杉（ら）に敵意を示していた聴衆と大杉（ら）の間の距離が縮まったといっても過言ではない。手を結ぶのは、もう目と鼻の先の距離ではない。

もし、聴衆の鎮静化のために、意識的に大杉（ら）が警察官を挑発したならば、それは「民衆的本能」（ここで言う民衆とは、おそらく労働者を指している）に賭けた行動だと言ってよい。また、一方では、次のような戦略も立てていたのかもしれない。それは、弁士がヤジに応答することによって、会場内が鎮まり、聴衆と弁士の「対話」が始まる、という戦略である。だが、このような他者を利

用した——悪く言えば、他者によりかかった——戦略は、あまりに不確定要素がありすぎて、洗練された戦略とは言えないだろう。

大杉の戦略に、もし弁士の応答が計算されていたら、それは先に見た雄弁術におけるヤジの対処法に既に敗れていると言えよう。弁士は、ヤジに応じないことが基本的な姿勢だったからである。では、大杉は、それをどのように出し抜いたのだろうか。

話が半ば頃になつて頻りに弥次る男がある。それで私に同情ある聴衆は「彼奴を擲れ」と総立ちになった。すると、その男はつか／＼と演壇に近く進み出て来た。よく見れば大杉君だ！昨夜は仲よく話した大杉君が、今日私の演説会を弥次りに来て居るのである。それで、私は大杉君をさし招いて、「僕の話が済むまで待つてくれ給へ、話は後でしやうや」と云ふと、「いやだ此処で、話したい」と云ふ。「それでは、話し給へ。僕の演壇を君に明け渡すから」と云ふやうな意味のことを述べて、私は引き下つた。

聴衆は吃驚してゐる。大杉君は、なんでも数年来、その時のやうな聴衆に話をするのは始めてだったとかで、十数分も話してゐたようだった。そして云ひたいことを云ふた後に、臨監の警官が『弁士中止』を命じて、大杉君は、弁士室に這入つて来た。そして大杉君は、フランスの議会の例を引いて、「演説も会話的でなくてはいかぬ。一人が一時間も、二時間も一本調子で喋るのは専制的だ。聴衆と講演者が合議的に話すのが真のデモクラチツクな遣り方だ」と教へてくれた。私はそれに感心した。たゞ私は「それは小集会には適するが、大衆の場合には混

乱に陥る恐れがある」と云った。大杉君は風習までにアナキズムを注入することに努力してゐるのだとはその時に私の感付いたことであつた。それで、大杉君の一派が裁判官の前で起立しないこと位はあたりまへだと知つたことであつた。(賀川、前掲文)

右に引用したのは、先に示した賀川の大杉への追悼文だが、賀川が大杉に演壇を譲るという一連の行為のシーンが描かれている。このやりとりについては、「新秩序の創造」には「最後に僕が演壇に起つた」としか記述が無く、第三者の立場で描いた、友成与三吉「四月三日の夜」(『先駆』一九二〇年五月)には異なる様子が記されている。¹²⁾三者の記述が異なるのは問題だが、本稿ではあくまでもヤジの戦略の考察しているため、ここでは賀川の記述に従つておく。

まず、賀川と大杉の立場を確認しておくために、弁士室でのやりとりを見ておこう。弁士室で賀川は、大杉の「対話」的な演説会の在り方を聞き、「感心」しながらも、「大衆の場合には混乱に陥る恐れがある」と反論している。それに対して、大杉は「聴衆と講演者が合議的に話す」「対話」的演説会を求めた。ここに両者の立場の相違点が明確に読み取れるだろう。賀川にとって演説会とは、あくまでも「秩序」を保った、言い換えれば、弁士の見(魅)せる身体によって生み出される場であつた。よって、大杉が言う演説会が、彼には聴衆のヤジによって会場が混乱し、更に弁士の応答が輪をかける、というような図式に見えたのである。この点を踏まえて、大杉と賀川のやりとりを見てみよう。先述した通り、賀川は演説会の

「秩序」を保持する立場に立っていた。よって、賀川は聴衆が「総立ち」になった時、賀川にはヤジを振り切つて演説を進めていく、という選択肢もあつた。が、賀川は大杉と知り合いだったために話し合いによって、ヤジによる混乱を收拾しようと努めたのである。

この行為が裏目に出た。大杉の意志、すなわち「対話」を望むことを知ること、賀川は演説を続けるかどうかの瀬戸際に立ってしまったのである。演説の続行か、それとも沈黙か。しかし、賀川はこのいずれも選ぶことなく、聴衆が「吃驚」する演壇の譲渡というかたちで演説を放棄しよう。この行為は大杉への配慮によるものだろうが、一方で、雄弁術―弁士によつてもたらされる「秩序」の回復を、図らずも内包している。しかし、大杉の登壇は「秩序」の回復をもたらすことはない。なぜなら、彼が弁士になるということは、「対話」による演説会が誕生を意味しているからである。

この一連の両者のやりとりを明らかにしていくと、雄弁術がいかに「秩序」の保持に有効であつたかが分かるだろう。本章で取り上げたヤジを無視するという、基本的な対処法はそれをよく物語っている。それに対する大杉のヤジの戦略は、弁士の排除をいかに遂行するかということが大きなポイントであつた。組織的なヤジによつて弁士の孤立を促し、演説会に「新秩序」を用意する。その最終局面が弁士の交代であつた。大杉は聴衆の再秩序化、そして「対話」への回路を拓く役割―弁士を自らが担うことで、「新秩序の創造」を生み出したのである。

四、おわりに——ヤジの遺産——

演説会での「対話」を求める、大杉のヤジの戦略について、大沢正道は「このような（賀川が演壇を明け渡す・服部注）ケースはまづ珍しい方であって、普通はもっと激しい聴衆との弥次の応酬、介入してくる官憲との小競り合いを繰り返したものとおもわれる」と指摘している。この指摘は、正しい。なぜなら、先にも述べたように、その闘争における戦略は、他者によりかかっているため、不確定要素を内包せざるを得なかったからである。が、それは逆に大杉のヤジの戦略のユニークさとも言えるのではないか。大杉の「キャラクター」とアナーキズム運動の関係性を、浅羽通明は次のように指摘している。

後輩の育成に、会議の指導に、また街頭のトラブルを即権力否定劇と化してしまふパフォーマンス等々に顕著な大杉のキャラクターは、いかにも、個を尊重した決定、自主性の教育、権力なき自治といったアナーキズムの実践即啓蒙でもあったろう。（浅羽、前掲書）

「アナーキズムの実践即啓蒙」は、「大杉のキャラクター」によって支えられていた。それはヤジの戦略においても、同様だったに違いない。その戦略の特徴を端的に言えば、言語を伝達媒体として用いず、身体を重視した点にあるだろう。そして、そこには大杉の何らかのねらいがあったに違いない。

ヤジには、他者が読み取れる明確なメッセージがない。それをや

や乱暴に言い換えれば、ヤジは、コミュニケーションを可能とする論理的に構築された言語ではなく、ただの声と身体動作と言えらう。だが、ヤジの応酬と身体動作の連続は、時として思想を創出する。「主体性を要求する姿勢」（浅羽、前掲書）を貫く大杉のねらいはそこにあった。一方通行の形態を持つ演説を批判した大杉は、あくまで聴衆の間での思想の創出、獲得を重視した。つまり、大杉にとって身体とは、「主体性」を獲得するための道具だったのである。

ヤジによる「新秩序」の〈生成〉の過程は、幾何学的で変数に富んでいる。これが大杉のヤジの戦略のユニークさであり、本質であった。そして、戦略そのものはアナーキズム運動という場を離れて、メディアにおけるテクノロジーの進歩というかたちで、更に進化を遂げている。それは演説の延長線上にある、ラジオ、テレビのような一方通行のメディアではなく、双方向マルチメディアを可能としたインターネットの登場である。インターネットでは、しばしば当時の双方向メディアとして例示される雑誌・新聞の投稿欄と異なり、リアルタイムで誰でも弁士となり、声を挙げることができる。そして、そこには彼が対峙したであろう、雄弁術のベースとなる身体は失われている。テクノロジーの進化によるメディア空間の変貌を、大杉はどのように見るだろうか。

テクノロジーの進化による新たなメディア空間の確立は、大杉が望んだ「対話」への回路を確固たるものとした。だが、それと同時にメディアリテラシーやメディア倫理等の問題を抱え込むこととなる。新たなメディア空間における自由と「秩序」の問題。それは、

大杉のヤジの戦略における臨界点とも言えよう。

注

- (1) 評伝としては、秋山清『大杉栄評伝（秋山清著作集 第5巻）』（二〇〇六年八月、ばる出版）や大沢正道『大杉栄研究』（一九七一年七月、法政大学出版局）、鎌田慧『大杉栄 自由への疾走』（二〇〇三年三月、岩波現代文庫）、竹中労『断影 大杉栄』（二〇〇〇年三月、ちくま文庫）がある。
- (2) 「号令と演説とアナキズム——大杉栄における「吃音」の問題」『初期社会主義研究』一九九八年十二月、「身体感覚的社会主義のゆくえ 大杉栄のアナキズムと脱植民地主義の言説」『現代思想』二〇〇四年五月。
- (3) 飛矢崎雅也は「第一章 先行研究の概観と分析」において、「大杉栄に関する先行研究」を整理している（『大杉栄の思想形成と「個人主義」』二〇〇五年九月、東信堂）。
- (4) 発禁と活字メディアをめぐる大杉の戦略についての考察は、大和田茂「大杉栄、叛逆精神とメディア戦略」『国文学 解釈と教材の研究 発禁・近代文学誌』二〇〇二年七月）がある。
- (5) 大沢正道編『大杉栄年譜』（『初期社会主義研究』二〇〇二年二月）を参照。なお、「演説会もらい」について、大沢正道が次のように指摘している。

再開された大杉の活動は、雑誌の発行ではなくて、「演説会もらい」といういわば演説会への殴り込みである。一九一九年（大正八年）に入って、労働組合は目覚ましい勢いでつきつきに結成され、労働争議もまた急激にふえていった。それに伴って、各所で労働問題に関する演説会が開かれたが、そのほとんどはまえに述べた鈴木路線かさらに右寄りの労資協調論に終始していた。支配階級は、勃興する労働組合を力で禁圧するよりも、むしろ労資協調主義の路線に引きずり込んだ方が有利と判断したところから、御用学者やジャーナリスト、職業運動家を動員して、一大キャンペーンを繰り上げたのである。言論の自由も経済力もたない大杉たちには、これに対抗する演説会を開催することができない。そこから編みだされた戦術が、この「演説会もらい」であった。（大沢正道「5章 労働運動への前進 1節 北風会の結成へ」『大杉栄研究』一九七一年七月、法政大学出版局）。
- (6) ヤジについては、小南浩一の「代表民主制に対する大杉の本質的な懷疑が含意されている」（『賀川豊彦と大杉栄——大正デモクラシー期における労働運動の可能性——』『法政論叢』二〇〇六年十一月）とあった指摘や「演説会もらい」の実践について、「壇上から語る権威的説法を、双方向討論へカスタマイズして見せるアナキズム革命の実践的宣伝だった」（浅羽、前掲書）という指摘がある。
- (7) 本稿の引用は、『大杉栄全集 第6巻』（一九九五年一月「復刻発行」、日本図書センター）による。
- (8) 古市は次号に渡って、光線だけではなく、音響や実際の「大都市」の会場における設備の検討も行っている。
- (9) 大沢正道「5章 労働運動への前進 1節 北風会の結成へ」、前掲書。演説会の主旨は、大沢正道編『大杉栄年譜』（『初期社会主義研究』二〇〇二年二月）を参照。
- (10) 大沢正道「第5章 労働運動への前進 1節 北風会の結成へ」、前掲書。
- (11) 引用は、『賀川豊彦全集 第二二巻』（一九八二年二月「第一版第三刷」、キリスト新聞社）による。なお、全集収録のテキストのタイトルは「可愛い男の大杉栄——悪口云はれても悪い気はしない——」とある。
- (12) 友成与三吉「四月三日の夜」（『先駆』一九二〇年五月）は、大杉と賀川の両者の姿を、次のように伝えている。引用は、法政大学大原社会問題研究所編『日本社会運動史料 機関紙誌篇 新人機関誌 デ

モクラシイ 先驅 同胞 ナロオド』(一九九七年一〇月「第2次発行」、法政大学出版局)による。

賀川氏が演説を初めてからしばらくして褐色のトルコ帽にレインコートを着て、煙草の煙をプカリ／＼とあげながら壁のような顔色をした大杉栄氏が控室から入って来て弁士席へ腰をかけた。しばらく聴いてゐたが、やがて立上つてつかつかと会場の後方に赴き「そんな事は分つてゐる数字なんかぬきにしろ。要点を云へ。」と弥次り出した。これに呼応して会場に散在してゐた一味の面々は喧かましく騒ぎ立て、これに對して一般の聴衆が憤慨して応戦し出した。大杉氏は忽ち警官の囲むところとなつたが、「一言二言の批評は好い筈だ。」と頑張つて会場を出ようとしな。遂には演壇へ飛上つて「諸君自由を重んじ給へ」と云ふ訳だ。しかし賀川氏はかまはず演説を続けた。大杉氏はまた演壇の横の弁士席に陣取つて煙草をプカリ／＼やりながら急所／＼に半量を入れる。後ろの方からも騒ぎ立て、誰かゞ引張り出される、大杉氏はまた演壇に飛上つて「諸君自由を重んじ給へ。賀川君しつかりやり給へ。」と真黒な眼玉をギロリ／＼光らせる。賀川氏が笑顔になると聴衆からも笑声が起つた。それから比較的和氣藹々として進み、賀川氏も大杉氏の「人格とは何ぞや。生命とは何ぞや。そこをもつと詳しく。」と云ふより手痛い弥次にひるまず長時間の熱弁を振つた。賀川氏が「生命と愛と人格とが支配する」など、咆哮して大きなジェスチャアをやると「アーメン」と大杉氏が怒鳴る。労働者は自分自ら、労働組合を組織し生産者議会によつて!」賀川氏がと云ふと「それでやつとはつきりした。自分自らがだね」と大杉氏が註釈する。聴衆からも拍手が起る賀川氏の演説はどう／＼数字をぬきにする事になつて、やゝ大杉氏達の方に話が引張られたが、しかし両々相俟つて実に緊張した場面を見せて呉れた。その後の控室に於ける賀川氏と大杉氏の対話も面白いものであつた。賀川氏が「僕だから好いが他の人だつたら怒るぜ」と云ふ

と大杉氏は「あれ位はまるで笑談のようなものだ。いつもならどうしてあれで納まるものか。君だから勘弁してやつた。とにかく聴衆は弁士を監督する必要があるからな。恰も国民が政府を監督する必要があるからな、恰も国民が政府を監督するのと同様さ。僕はコンバーセーションの歴史をしらべて見た聴衆と弁士とは会話が出来る筈だ」「それは一体どう云ふ訳だ。」と賀川氏が乗り出す。大杉氏はフランスの議会でどうのこうのと好い加減な事を云ふ。「とにかく出来るんだよ」「大勢ではとても出来まい」「いや、やれば出来るんだ」と云ふ調子だ。しばらくして賀川氏は帰途に就く。雨のせいかわ、生田、室伏等の弁士の顔も見へないので私も帰つた。聞けば大杉氏は後で聴衆との会話を実行したさうだ。さぞ聞きものだつたらう。

この友成による記事は、大杉の姿を詳細に描いているが、大杉本人は「新秩序の創造」で次のように反論している。

友成と三吉君というのは、どんな人か知らないが、余程眼や耳のいい人らしい。僕がもしないまた言ひもしないことを見たり聞いたりしている。たとえば、その記事によると、賀川豊彦君の演説中に、僕がたびたび演壇に飛びあがって何か言っている。

(13) 大沢正道、前注(10) 同論文。

(大学院博士課程)